

成蹊の桃の樹の下で



成蹊学園・成蹊大学サステナビリティ教育研究センター/理工学部 池上敦子

大学 11 号館，12 号館，13 号館に囲まれたスペースに咲く，ハナモモをご存知でしょうか。その清々しさ，明るさ，可愛らしさ，上品さを見るたび，成蹊の花だなと感じます。

成蹊の建学の精神が「個性の尊重」「品性の陶冶」「勤労の実践」であることは，みなさんご存知の通りですが，これは単に外向けに掲げられたものではなく，これこそが成蹊の教育であると感じることを，たくさん体験しました。

私は，学部（数学科）卒業であり大学院に進学していません。しかし，成蹊大学には助手として採用していただき，人生が大きく変わりました。キャンパスが美しいだけでなく，素晴らしい出会いがありました。私の専門分野は，オペレーションズ・リサーチ（OR）といいます。もうちょっと細かくいいますと，その中の数理最適化，また，その中の離散最適化とか組合せ最適化という分野です。私が就職したとき，工学部（理工学部の前身）の経営工学科には，日本に OR が広がっていく大事な時期に活躍された前田活郎先生[1]と，アメリカで学び，現場のための OR に重点を置き，問題把握の重要性を主張されていた星孝雄先生[2]がいらっしゃいました。研究者になる前の若者にとって非常に贅沢な顔ぶれで，今考えると，当時の成蹊の人事のセンスに驚くばかりです。星先生は，50 歳前に大学を離れ，最終的にはアメリカで起業されましたが，私の中に眠っていた数理最適化分野への興味を呼び起こすテーマを数多く与えてくださいました。これらの内容は，学会誌に「成蹊大学の OR 教育の歴史」という題目で紹介してあります[3]。ちなみに，星研究室の卒業生には起業家が多く，その個性や独自の才能をいかして活躍されていることを，いまでも知ることができます。

星先生が大学を離れてしまい，学部しか出ていない私に残されたものは，大好きになってしまった研究への思い，知的好奇心だけでした。ひとりぼっちでも毎日が楽しく，365 日のほとんどの時間を研究室で過ごしていました。応援＆面白がってくださった先生もたくさんいらして，成蹊は「独自の力で成長すること」「学歴も背景もない若者の前向きな活動」を当たり前のように見守ってくれる，本当に豊かな環境を持っています。建学の精神の通り，個性を尊重し，それを伸ばすのです。もちろん，辛いこともありましたし，よいことばかりではなかったですが，春ならハナモモの樹のそばに行き，そうでないときは，グラウンド・体育館に向かう陸橋の上から松林を眺めると，不思議と心がやすまり「成蹊でよかったなあ」という気分になれました。

2015 年から 3 年間，成蹊小学校から中学・高等学校，大学までをつなぐ一貫連携教育担当の仕事をし，2018 年からこの 3 月まで，サステナビリティ教育研究センターの所長を務めました。成蹊大学には教育学部はないですが，それぞれの専門をもった教員が，小学校から大学まで揃っています。学園の仕事をするまでは，大学のことしか知らなかったのですが，成蹊小学校や成蹊中学・高等学校の教職員（仲間たち），児童・生徒と一緒に活動する機会が増え，ますます成蹊教育の意味，価値を感じるようになりました。

私は「勤労の実践」の意味も大好きです。勝手な解釈かもしれませんが、勤労は単に「働く」という意味ではありません。「体験する」「観察する」ことによって、お仕着せの言葉などにまどわされないで、しっかり真実を把握し、その上で自分の頭で判断して、行動ができる、という意味と感じています。まさに、成蹊の教育は、それを目指しています。だからでしょうか、成蹊の児童・生徒は「みんなと同じでなくてはいけない」という縛りを持っていないように思います。なぜなら、講演会を開催したときの質問も本当にいろいろで、自分独自の興味をぶつけてきます。私にとって、非常に楽しかった思い出として、中学校で開催した「星空観察会」があります。天文部の高校生もいて、保護者に連れられた小学生もいました。小学生は、中高生に負けない知識と興味で、JAXA から来てくださった先生や我々教員や中高生をも圧倒していました。その後、望遠鏡でいろいろ眺めているとき、今度は高校生が話しかけてきました。私に対し、なんの研究をしているのか、という質問から始まって、自身の興味まで話してくれました。詳しいテーマは忘れましたが「これこれの問題に対し、世の中ではこう言われていますが、先生はどうお考えですか。ぼくは、こう思うのですが、いかがでしょう」といった感じで議論が進みました。想像していなかった状況に、本当に愉快的気分になり「これって、成蹊？♪」とうれしくなりました。この日は「みんな自由にどんどん自分の興味や力を伸ばしていいのだな」などど、当たり前のような（そして意外と実現が難しい）真実を大事に思いました。でも、そんなこんなで、ぐずぐずしていたら、鍵がかかった校舎から締め出され、中学生たちと職員室の窓を叩いた覚えがあります。

成蹊小学校で驚いたことは、観察した結果の絵・図のレベルの高いこと、文章力が高いことです。小学生と化石採集にいったときに、どの児童の絵も独自の視点で観察されている上、非常に美しいものでした。まさに成蹊教育を代表とする「観察する」「観測する」「自らが体験する」の積み重ねの結果だと思います。文章が綺麗なのは日記のせいかな、とも思いました。これらは、成蹊の中のほんの一部の事実ですが、実際には、こんな要素で埋め尽くされているのです。

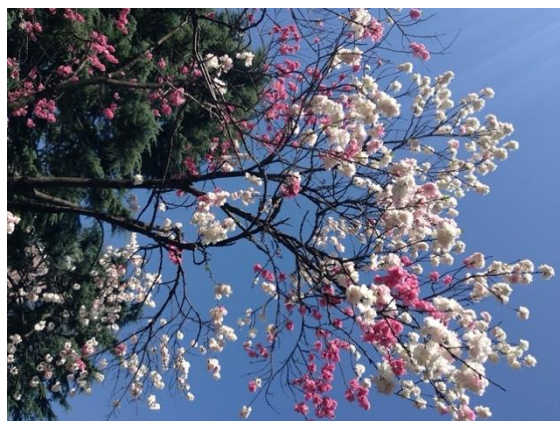
大学教員としての私には、成蹊の学生には素敵な特長があると感じています。真面目で素直で、自分の好奇心にヒットすると驚くほど力を伸ばします。研究室では1年半、大学院まで進学すると3年半一緒に研究することになりますが、その間の成長を見ることができるのは何よりの楽しみと幸せであります。私には、大きく成長した頼もしい弟子たちがたくさんいます。一方、自分が若い頃、恩師にいただいた「大きな知的好奇心」に匹敵するほどの財産を、自分の弟子たちに提供できたかなあと思うと、心もとない気分になります。

理工学部の再開発でも、私の大好きなハナモモが大事にされるよう心から願っています。

[1] 石田武雄, 前田活郎, 『やさしいリニアー・プログラミング』, ダイアモンド社, 1958.

[2] 星孝雄, 『技術者のための OR 入門』, 日本能率協会, 1980.

[3] 池上敦子, 成蹊大学の OR 教育の歴史, オペレーションズ・リサーチ, Vol.64, No.1, p.26, 2019. http://www.orsj.or.jp/archive2/or64-1/or64_1_26.pdf



成蹊のハナモモの樹

著者のプロフィール

池上敦子（いけがみ あつこ）

成蹊学園・成蹊大学サステナビリティ教育研究センター 所長 / 理工学部 教授

立教大学 理学部 数学科卒業，成蹊大学理工学部/工学部助手，講師，准教授を経て，2009年4月より教授。成蹊学園においては，2015年4月より2018年3月に常務理事，2018年4月よりサステナビリティ教育研究センター所長。

研究では，オペレーションズ・リサーチの応用，組合せ最適化，特に現実の問題のモデル化に興味をもつ。 <http://www.ikegami-lab.tokyo/~atsuko/>